文化財をたずねて③
《奈路の堀割》

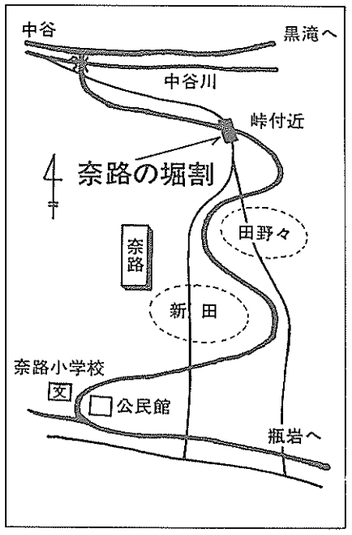
奈路地区は山間ではあるが、よく土地が開発されている。しかし谷川が底深く流れて、水利に恵まれないので、水田に利用することはなかなか困難であった。

藩政時代、この地を領していた桐間氏は、水利の便をはかり、水田を作りたいと考えて、堀割の計画をたてた。そして、川村泰四郎・代七の父子に命じて、中谷川の水を引いて堀割を通じ、奈路に流す計画をたてた。両人は土工頭シゲジを中心にこの難工事に取りかかり、嘉永二年(一八四九年)、さしもの難事業を完成、中谷川の水を奈路に流すことに成功した。

おかげで、田野々、新田、宮の谷、藤丘の各地区を合わせて、四町歩の水田をうるおすことができた。市道奈路―黒滝線を奈路小学校から約七百㍍進んだ奈路の峠の道路の下に、奈路の堀割(長さ約六十㍍)が通り、清らかな中谷川の水を奈路に送りつづけている。

堀割の入口

【交通】…自家用車で、市役所から三十分ほどかかる。(峠付近に車を止めると、眼下に、堀割りに通ずる小さな溝が通っているのが見える)



奈路・川村清雄(すみお)さんの話

代七は、私のひじいさんにあたりますが、堀割そのものの話はあまり聞いていません。

測量は父親の泰四郎が中心になって、上(カミ)と下(シモ)から掘りすすんだそうです。

つきあった場所は、少し段差がある程度で、当時としては、一画期的な技術だったと思います。

この功によって、山内家より足軽として帯刀を許されています。

山内家は、外山に猪狩山を持っており、泰四郎は、猪を追い出す「勢子(セコ)」として活躍、三〇～四〇貫もある猪を素手で取りおさえたこともあるということです。

泰四郎は、慶応四年(明治元年、一八六八年)九十歳で、長男代七は明治二十三年(一八九〇年)七十二歳で亡くなっています。

堀割の出口

ご家庭で話し合って答えてください。答えは、この広報に出ています。

■**もんだい**・〝いこいの場に〟と○○○学校跡地の刈りあげが一月二十四日行われました。

■**しめきり**・3月15日

■**おくり先**・〒783 南国市大埇甲二三〇一 南国市役所内広報委員会親子クイズ係

■答えのハガキには**必ず、住所・氏名・年齢・職業**を書いてください。

■**賞品**・特賞千円＝三人、残念賞(記念品)＝五人

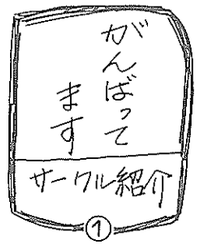
第124回正解者発表(敬称略)
(応募総数56通)

■**こたえ**・五百三十七人

■**特賞**・千円＝三人
前田典俊(岡豊町)
島崎修造(宍崎)
野口憲一(下野田)

■**残念賞**・記念品＝五人
永吉和子(廿枝)水田女公美(久礼田)宮崎美佐(国分)田中才知子(東崎)山内盛子(比江)

あひる会のみなさん



バドミントン「あひる会」

スポーツするのは大好き、でも上手でないとなかなか入ってゆけない＝そんな仲間が集まって「あひる会」が生まれました。

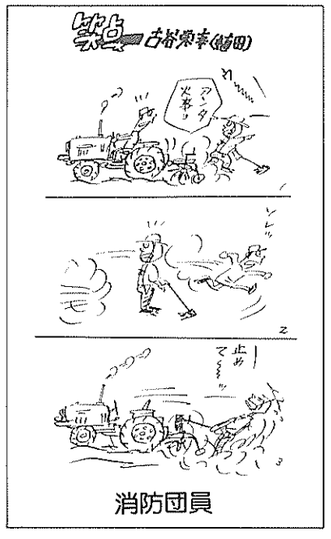
そもそもこの会は、市民体育館が指導していた〝広くスポーツを市民に〟と言う社会体育より独立したもので、最初はなわ飛びやバスケットなどいろいろしていました。しかし自然に、みんなが楽しめる手軽なバドミントンが良いということで落ちつき、現在に至っています。

練習は毎週土曜日、午後七時半より約二時間、真剣に、時に大きな笑いの中でシャトルを追いかけています。

田村の藤宗さんは、『おとうさんといっしょに夫婦でがんばっています。週一度の和気あいあいのバドミントンが何よりも楽しみ』、ある三十二歳の主婦は、「やせるためにも、健康にも良く一石二鳥です。』少しお年をめした稲生の中沢さんは、「スポーツをするとなると、ある程度上手でないと参加しにくいし、試合にも出ることはできません。その点この会では下手でも気がねなしにできます。」と感想を述べています。

安河内会長によると、「一応会則はあり、ラケット本人持参、子ども連れは禁止、会費は年額千円と決まっています。入会は自由ですが、やはりバドミントンが好きでないとなかなか長続きはしないようです。」とのこと。

スポーツの経験のない主婦などが気軽に参加し楽しめるサークル。みなさんも健康の汗を流してみませんか。



消防団員

田役の土砂は……

水止め期間中の田役による用排水路の土砂は、千屋崎の不燃物理立地への受入れはできませんのでお知らせします。

【環境保健課】

南国歌壇

散らばれる追儺の豆の庭先に
潤びて立春の雨しずかなり
亀岩 島本 栄

ルビー色の枸杞の実の艶る生垣に
余生みぐるみ囲まれて住む
浜改田 清水愛川

久久に和気藹々で刻忘る
浦辺のホテル婦人の集い
三畠 小笠原綾子

さ庭辺のしだれ梅の花ほころびぬ
乙女姿にしばしたとへん
里改田 楠瀬米井

小雪舞う岬つばきの衣着て
岩礁のうた遠くきく朝
領石 唐岩 勇

見納めとなるやも知れぬ初日の出
拝む患者の車椅子おす
岡豊町 葛目治子

南国柳壇

さりげなくギンギラ呟う若い星
古市 島田稔子

独り者慣れぬ指先針を持ち
十市 森尾 環

ひたすらに咲きたる花や梅一輪
立田 北村幸江

頭出すつくしよ春はまだ寒い
十市 沢村鶴一

南国俳壇

古戦場母の匂いの霜冠むる
こけしの眼ほろほろ笑う雪しぐれ
一月の野に父の声殖え続く
天近く乳房のほかは濁れる村
紙供養 折鶴冬の陽を浴びる
市の尾の落日 べっこう飴きらきら
落葉焚く匂いが好きと掻き始む
気安さに若菜の粥をふるまへる
草焼きし灰の葉のまま茎のまま

楠瀬秀子(花柳俳句会)
福井英子(〃)
岡田寿子(〃)
森本 翔(大篠俳句教室)
別役敏子(〃)
山崎光子(〃)
橋本きよ女(柿の実会)
竹田明代(〃)
大崎暢子(〃)